

「児童が主体的に考える」校長講話の実践

大島南央小学校 松原 好広

【要旨】

筆者は、新しい枠組みのひとつとして、廣池千九郎の提唱する「三方よし」の考え方を活用した校長講話を行った。これは、「自分よし」「相手よし」「第三者よし」を目指した校長講話である。その後、これまで実践してきた、「自分よし」「相手よし」の校長講話を行わずに、最初から、「第三者よし」を考える校長講話を実践することにした。このことにより、児童が主体的にものごとを考えられるようになるのである。

「児童が主体的に考える」校長講話を積み重ねたことにより、児童は、「三方よし」、さらには、「第三者よし」の考えを深め、主体的にものごとを考えられるようになった。このことから、児童にとっての校長講話は、自分の疑問に答えたり、自分の考えを深めたりするものでなければならないと考えたのである。また、校長講話は、校長の「何を伝えたいか」という教育的意図が大切であり、「児童が主体的に考える」校長講話が有効であると推察された。

キーワード：校長講話、主体的に考える、三方よし、第三者よし

I これまでの研究の経緯

令和2年3月、麗澤大学院において校長講話における修士論文⁽¹⁾を作成した。修士論文の概略は、次の通りである。

公立小学校の校長は、毎週、全校朝会において、児童、教師の前で話をする。このような機会は、道徳科の授業と同じか、それ以上の回数に上り、道徳教育の大きな柱となる。

廣池千九郎⁽²⁾は、「すべての存在は、互いにつながり合い、支え合う関係にある。」という相互依存の関係が大切であると考え、その具体的な実践として、「自分よし」「相手よし」「第三者よし」の「三方よし」という人生の進むべき方針を示した。

校長講話を行う際、この「三方よし」の方針が、「児童の道徳性の育成」につながるものと考え、児童の道徳性を育成することにした。しかし、「三方よし」は、児童にとって理解することも、実践することも、決して容易なことではない。そこで、「三方よし」を、「あなたと出会う」段階、「あなたとつながる」段階、「その向こうにいるあなたと出会う、そしてつながる」段階ととらえ、校長講話を行うようにした。

各段階の講話は、次の通りである。①「あなたと出会う」段階は、挨拶、礼儀などの講話である。②「あなたとつながる」段階は、思いやり、勇気、感謝などの講話である。③「その向こうにいるあなたと出会う、そしてつながる」段階は、第三者、いじめなどの講話である。(上掲書⁽¹⁾ p. 28)

校長講話の実践は、1年半積み上げた。実践後、校長講話が、児童にどのように受け止められたかを把握するために、自由記述のアンケートを岩佐信道⁽³⁾の考え方に基づいて、児

童の記述を次の5段階に位置付けた。①ほとんど興味や関心がなかったことを示す記述、②一部、関心があったことを示す記述、③全体として校長講話を楽しんで聞いていたことを示す記述、④心が動かされ、理解が深まり、自分の生き方の参考になったことを示す記述、⑤すべての人のためになることをしようと、行動を起こしていることを示す記述である。

(上掲書⁽¹⁾ p. 57)

また、この5段階の結果を比較するために、区内のD小学校のT校長にも同じアンケートを依頼し、D小学校における調査も実施した。その結果、次のようになった。

自校の特徴は、④(35%)、⑤(23%)の段階が多く、合計58%に達していた。記述内容としては、『三方よし』とは、人が嫌な思いを一切しないという意味だと思いました。「私も思いやりのある人になりたいと思いました。」など、「第三者よし」の記述が見られた。(上掲書⁽¹⁾ p. 58～p. 61)

D校の特徴は、③(74%)の段階が多く、全体の4分の3近くに達していた。具体的には、「話が楽しい」「話がわかりやすい」などの感想、「パソコンを活用してわかりやすい」「ビデオや画像がいい」などの手段や方法に対する記述が多く見られた。(上掲書⁽¹⁾ p. 61～p. 64)

修士論文から明らかになったことは、それぞれの校長の教育的意図の違いが、自由記述の段階の違いに表れていたことである。このことから、教育的意図をもって臨んだ校長講話が、児童の道徳性の育成に左右するのではないかと結論付けたことである。

課題としては、廣池千九郎の考える本来の「三方よし」は、最初から、「第三者よし」を考えるものである。修士論文では、児童の発達段階などを考慮して、「自分よし」「相手よし」の講話を併せて行った。そこで、今後は、「自分よし」「相手よし」の校長講話を行わずに、最初から、「第三者よし」を考える校長講話を実践していこうと考えた。

II 「児童が主体的に考える」校長講話の意図

以上の研究の経緯を踏まえ、本研究では、これまで実践してきた、「自分よし」「相手よし」の校長講話を行わずに、最初から、「第三者よし」を考える校長講話を実践することにした。

廣池千九郎の門弟であった中田中⁽⁴⁾は、廣池の「自分のことだけを考えてやるのなら不道徳でもできる。自分と相手のことだけを考えてやるのなら、知恵がなくてもできる。しかし、すべてが都合よくやっていくためには、自分も相手も第三者のことまでも考えてやっていかなければならない。『三方よし』というのは、知恵がいるものである。」の言葉を紹介し、廣池に対しては、「いろいろな問題に直面しても、即座に、その場ですべてが解決するように常に考えを巡らしていた。」と回想していた。

筆者は、中田が紹介した廣池の言葉から、「第三者よし」を考える校長講話を実践することは、児童が主体的にものごとを考えられるようになるものと考えた。また、修士論文の研究結果からも、児童の多くが、「自分よし」「相手よし」に対する理解が深まっていた(5段階評価で筆者の意図する④及び⑤の児童が58%に達していた)ことから、最初から「第三者よし」を考えることができるものと判断したのである。

以上のことから、最初から、「第三者よし」を考える校長講話を行うことにより、児童が主体的に考える校長講話になるのではないかと考えた。そこで、次に、「児童が主体的

考える」校長講話例を紹介する。

Ⅲ 「児童が主体的に考える」校長講話の実際

「三密」を避けて 令和2年6月8日（月）放送朝会

学校が再開して2週間が経ちました。今日から給食も始まります。皆さんは、この期間、「三密」と言われる生活をしてきました。私たちのまわりには、今でも、ウイルスが隠れています。ウイルスに感染しても、症状があらわれない人もいます。ウイルスに効く薬もつくられていません。だから、これからも注意していかなければなりません。

しかし、私たちは、感染する前まで、まるで「三密」の生活をしてきました。たとえば、友達と会えば、集まって話をしたり、うれしいことがあったら握手をしたりしました。そんな「三密」の生活は、じつは友達と仲良くなることにつながっていたのです。

校長先生は、もし皆さんが、「三密」にならない生活をこれからも続けていたら、友だちと仲良くなることができなくなってしまうのではないかと心配しています。せめて、少し離れてお話するなど、これからも友達と仲良くしてもらいたいと思います。そして、仲のよい友達だけでなく、その向こうにいる知らないお友達のことも自分たちと同じように大切にしてもらいたいと思います。

「三密」にならなくても、友達と仲良くできる。「三密」になっても、知らない友達のことも考え、仲良くできる。どんな友達ともみんな仲良くできる、日本一の大島南央小学校を作っていきます。

この校長講話は、新型コロナウイルスの影響で、臨時休校が終わり、再開となった令和2年6月の放送朝会での講話である。「児童が主体的に考える」校長講話は、このように、「自分よし」「相手よし」の内容には触れず、「第三者よし」を考えるものである。

この校長講話の内容は、「三密」になっても、第三者とも仲良くなることを目指したものである。なぜ、このような校長講話を行ったかという点、児童は、これまでは、「三密」により、仲のよい友達との「自分よし」「相手よし」の関係を成立させてきたのではないかと考えたからである。たしかに、児童にとっては、友だちとの「自分よし」「相手よし」の考え方も必要なことなのかもしれない。しかし、「第三者よし」の考え方からすれば、「自分よし」「相手よし」だけでは不十分なのである。児童には、「知らない友達とも、同じように仲良くする。」ことについて、主体的に考えてもらいたいと考えたのである。

ある5年生は、令和2年7月に行った「心に残る校長講話」のアンケート調査で、次のように記述していた。

一番心に残ったのは、三密を避けての話でした。今の僕たちには、何ととっても、このことがすべてだと思いました。三密を避けて、自分のいのちも、他の人のいのちも守りたいです。

このように、「第三者よし」を考える校長講話を行ったことにより、児童は、自分たち以外の第三者のいのちも大切にしようとする主体的に考えられるようになったのである。

Ⅳ 「児童の心に残る」校長講話ベスト10

児童にとって、どのような校長講話が心に残っているかを調べるため、令和2年7月に、4年生(24名)、5年生(24名)、6年生(46名)計94名を対象に、「児童の心に残る」校長講話(複数回答可)のアンケート調査を実施した。

校長講話は、令和元年10月28日(月)から令和2年7月20日(月)まで、合計25回行った。そして、25回のうち13回において、児童が主体的に考える校長講話を行った。その結果、児童が「心に残る校長講話」として選んだベスト10は、以下の表1のとおりになった。

表1 「児童の心に残る」校長講話ベスト10

順位	票数	講話名	テーマ	提示方法
1位	24	困っている人を助けてあげて	主体的に考える	マジック
2位	17	新型コロナウイルス イタリアの話	主体的に考える	画像提示
3位	16	ゴミのハロウィン	主体的に考える	画像提示
4位	12	マジック「サンタクロースとトナカイ」	主体的に考える	マジック
5位	10	「三密」を避けて	主体的に考える	放送講話
6位	9	読み聞かせ「どろかぶら」	心の美しさ	絵本提示
6位	9	読み聞かせ「ぼくはれもね一どやさん」	道を切り拓く	絵本提示
6位	9	読み聞かせ「中学生のいじめ作文」	主体的に考える	作文提示
6位	9	「若い女の人とお婆さんのどっちが見える？」	思い込みの怖さ	画像提示
10位	7	「3つのC」(チャンス、チャレンジ、チェンジ)	自分が変わる	放送講話

表1の結果から明らかなように、ベスト10のうち、6つ選ばれ、ベスト5のすべてが、「児童が主体的に考える」校長講話が選ばれた。

この結果から、児童は、校長講話を一方向的に聞くだけでなく、児童自身が、校長講話に思いを馳せ、疑問を感じたり、解決のための方策を考えたりしていたのではないかと考えられた。また、ベスト10の提示方法は、絵本・作文提示、画像提示、放送講話など多岐にわたっており、提示方法が「児童の心に残る」校長講話には影響してはいないことと考えられた。

このことから、児童が、「心に残る校長講話」として求めているのは、校長講話における提示方法ではなく、児童自身が主体的にものごとを考えることのできる校長講話であると推察された。

V 「児童の心に残る」校長講話ベスト3の実際

次に、「児童の心に残る」校長講話のベスト10のうち、ベスト3の校長講話を紹介する。

1位「困っている人を助けてあげて」令和2年2月20日(木)6年生を送る会

6年生の皆さん、もうすぐ卒業ですね。今日は、皆さんの卒業をお祝いして、ある方
にここへ来てもらうことにします。その方は、このホワイトボードからやってきます。

(ホワイトボードをもって登場する)

まず目を書きます。誰でしょうか。次に口を書きます。鼻を書きます。ほっぺたを書
いて、眉毛を書いて、顔の輪郭を書いて、最後が耳を書きます。もう誰だかわかりまし
たよね。誰ですか。みんなと一緒に声を出して、呼んでください。せーのー

「くまモン」

そうです「くまモン」です。では、もう一度、呼んでください。

「くまモン」

(ホワイトボードに書いたくまモンの眼が動く)

あれくまモンがここにやってきたようですね。こんにちは、くまモン。

「こんにちは、くまモンです」(校長による腹話術を行う)

あれ、くまモンがしゃべってくれました。

「6年生の皆さん、ご卒業おめでとうございます」

くまモンも6年生の卒業を祝って、ここにきてくれたのですね。では、ひと言、6年
生のためにメッセージをお願いします。

「6年生の皆さん、近くで困っている人がいたら、助けてあげてくださいね。僕もお
手伝いします。さようなら」

あれ、もうお別れですか。でも、またきっと会えますね。くまモン、さようなら。

(ホワイトボードに書かれたくまモンの絵を消して終わる)

この校長講話は、マジックのパフォーマンスを取り入れた校長講話である。これまでの
校長講話においても、マジックを取り入れた校長講話は、児童にとって興味関心の高いも
のであった。今回の校長講話においても、校長講話の内容よりもマジックに興味関心を示
す児童も少なくなかった。しかし、筆者は、「主体的に誰かを助けることを考えられるよ
うになってもらいたい。」という願いをもって校長講話に臨んだのである。

ある4年生は、令和2年7月に行った「心に残る校長講話」のアンケート調査で、次の
ように記述していた。

マジックはとても楽しい。でも、「三方よし」は、「なるほど」と思った。

このように、「なるほど」と思うことから、児童が主体的に考える最初の一步が始まる
のである。そして、その気持ちが、児童の心に残り、結果として、「心に残る校長講話」
に選ばれたのではないかと考えた。

2位「新型コロナウイルス イタリアの話」令和2年2月10日(月)全校朝会

新型コロナウイルスは、中国の武漢市というところにある魚市場で発生したと言われ
ています。症状としては、発熱、のどの痛み、咳、下痢、吐き気があると言われていま
す。感染すると、3日から14日でこれらの症状がでるそうです。新型コロナウイルス
は、今、世界中に広まっており、大きな問題となっています。

しかし、もう一つの問題が起こっているのです。それは、中国人やアジアの人たちに対する差別の問題です。これは、人権問題とも言えます。

そんな中、イタリアのフィレンツェという都市では、この画面のように、ある若い男性が、立て看板の隣で目隠しをして立っています。立て看板を見ると、そこには、「僕は、新型コロナウイルスではなく人間。僕を差別しないで。」と書いてあります。これを見た、現地のイタリア人は、どうしたと思いますか。じつは、この男性のことを男女問わずハグしたのです。そして、「あなたも私も大切な人ですよ。」と言ったのです。

このことを知ったフィレンツェのダリオ市長は、「中国人にハグしよう。」「これは、世界みんなの戦いだ。」とインターネットに書き込みました。すると、インターネットには、多くの人から写真が投稿されました。これが、その写真です。

大島南央小学校は、このように自分だけでなく、自分のその向こうにいるお友達も大切にする日本一の学校を目指しています。差別のない日本一の学校を皆さんでつくっていきましょう。

この校長講話は、新型コロナウイルスが、日本で流行する前の2月、イタリアで起きた人権問題を扱ったものである。校長講話の際には、プロジェクターで画像を提示しながら説明した。児童にとっては、大人同士、子ども同士がハグしている写真に、大きな感動を覚えたようである。

校長講話後、ある6年生は、次のように教えてくれた。

イタリア人と中国人の子ども同士がハグしている写真を見たとき、「世界は、つながっているんだ」と思いました。

このように、児童は、自分と仲のよい人同士がハグするのではなく、知らない人同士がハグする姿を目にして、つながることの大切さを感じたのである。そして、「自分よし」「相手よし」だけではなく、第三者の知らない人同士のつながりを再確認し、そのつながることの喜びを主体的に感じたのである。

3位「ゴミのハロウィン」令和元年11月5日（月）全校朝会

東京・渋谷のハロウィンは、毎年、仮装を楽しむため、若者たちが大勢集まってきました。しかし、多くの人たちが路上にごみを捨てるので、大きな社会問題になっています。

多くの人たちは、「自分の家じゃないから」「自分の家の前じゃないから」と言って、渋谷でゴミを捨てます。しかし、一度落ちたゴミは、誰かが拾わない限り、ずっと落ちています。

渋谷の街が大好きだから来ているのに、その街がゴミだらけというのは、やはり気持ちがよくありません。また、地域に住んでいる人たちは、もっと嫌な気持ちをしています。そこで、渋谷の街をきれいにしようと、地域の人たちが、ゴミ拾いを呼びかけました。

すると、ボランティアの人や仮装した若者たちが、ゴミ拾いをやってくれたのです。おかげで、たくさんのゴミを拾うことができました。ゴミを無くすことはできませんが、

ゴミを拾うことはできるのです。これは、とても素晴らしいことだと思います。

日本には、昔から「向こう三軒両隣」という言葉があります。家の前を掃除するときは、前の家と隣の家、自分の両隣の家の前を掃除するという意味です。これは、校長先生のいう「三方よし」と同じです。

残念ながら、今では、そんな付き合い方が少なくなってしまいました。でも、皆さんが、他の人のことを考えて、ゴミが落ちていたら拾い、ゴミを捨てないようにすることはできます。どうか、そういうことがしっかりできる日本一の学校を目指しましょう。

この校長講話は、東京の渋谷のハロウィンで、毎年、大量に出るごみを地元の人やボランティアの人、さらには仮装した若者たちがゴミ拾いをしたという内容である。校長講話の際には、プロジェクターを活用し、ゴミ拾いする人たちの姿を紹介した。

筆者は、ゴミを落とす人、それを見過ごす人たちだけでは、「自分よし」「相手よし」だけであって、「第三者よし」は成立しない。「第三者よし」が成立するためには、多くの人たちがゴミ拾いをする姿を紹介することが必要であると考えた。

そこで、プロジェクターを活用し、地元の人やボランティアの人たちの姿を紹介したのである。

講話後、ある6年生は、次のように教えてくれた。

ゴミを拾っている人たちが、とてもかっこよく見えました。そんな人たちのように自分も清掃活動に取り組みたいです。

児童にとって、「第三者よし」を考えることは容易なことではないかもしれない。しかし、このように、渋谷を訪れる人たち、渋谷で暮らす人たちのために、汗を流す地元の人やボランティアの人たちの姿を紹介することで、「第三者よし」を心から理解し、憧れ、同じように実践することを主体的に考えられるようになったのである。

VI 研究のまとめ

「児童の心に残る」校長講話のアンケート結果より、ベスト10のうち、6つの講話が、「児童が主体的考える」校長講話が選ばれた。さらに、ベスト5のすべてが、「児童が主体的考える」校長講話が選ばれた。

講話後のアンケート調査、聞き取り調査から、児童は校長講話を聞いて、そのまま終わってしまうのではなく、継続して、感じたり、考えたりしていることが明らかになった。これについては、これまでの校長講話で、「児童が主体的に考える」校長講話を継続して行ってきたことが大きな要因ではないかと考える。

「児童が主体的に考える」校長講話を積み重ねたことにより、児童は、「三方よし」、さらには、「第三者よし」の考えを深め、主体的にものごとを考えられるようになったものとする。言い換えれば、児童にとっての校長講話は、自分の疑問に答えたり、自分の考えを深めたりするものでなければならないのである。また、校長講話は、校長の「何を伝えたいか」という教育的意図が大切であり、「児童が主体的に考える」校長講話が有効であると推察された。

VII 今後の課題

今後は、道徳教育の要である道徳科の授業においても、「児童が主体的に考える」ことを目指した指導過程を構築していこうと考える。そのためには、留意しなければならないことがある。それは、道徳科の授業においては、単位時間における指導内容項目が決まっていることである。もちろん、「児童が主体的に考える」道徳科の授業においても、その時間のねらいである内容項目を一貫して用意すればよいのだが、たとえば、自分自身に関する内容項目の授業において、「三方よし」を目指す授業を行う場合、他の内容項目（たとえば、主に他者とのかかわりに関する内容項目）などの内容項目の発問も用意しなければならない。その際、道徳科の授業の特質上、異なった内容項目の発問を一単位時間の中で用意することがよいかという課題が生まれてくる。そこで、今後は、これらの課題をどのように解決すればよいか、「児童が主体的に考える」道徳科の授業をどのように実現することができるのかを考えていく必要がある。また、その際には、修士論文において活用してきた「自由記述の5段階評価の尺度」も導入し、「児童が主体的に考える」ことができたかについても明らかにしていかなければならないと考える。

【註】

- (1) 松原好広『「つながるいのち」の輝きのために～校長講話を通じた児童の道徳性の育成～』麗澤大学大学院修士論文（未刊行）2020年
- (2) 廣池千九郎『道徳科学の論文（全10冊）』、モラロジー研究所、1986年（初版1928年）
- (3) 岩佐信道「三方よしと相互依存のネットワーク」、『道徳と教育』、日本道徳教育学会、第336号、2018年3月、p.44
- (4) 中田中『思いでの旅 廣池博士に随行して』、廣池学園出版部、昭和35年 p.84～p.91

Child-centered principal's lecture practice

MATSUBARA Yoshihiro

Keywords : Principal's lecture, thinking independently,
good for all three parties,

【Abstract】

As one of the new frameworks, I give a principal's lecture that utilized the "sampo yoshi" concept proposed by Chikuro Hiroike. This was a principal's lecture that aimed at "doing good for oneself," "doing good for others," and "doing good for the third party". After that, instead of giving the principal's lecture on "doing what's right for me" and "doing what's right for the other party" as we had been doing up until now, we decided to start from the beginning with the principal's lecture on "doing what's right for the third party". In this way, the children will be able to think independently.

Through the repeated use of the principal's lecture, the students were able to deepen their "sampo yoshi" or "third-party yoshi" attitude and to think independently. From this, it was thought that the principal's lecture should be a way for the children to respond to their own questions and to deepen their own ideas. In addition, the educational intention of the principal's lecture, "What do you want to tell then?" was important, and it was inferred that a the principal's lecture in which "the children think independently" was effective.